日文　教授用資料
令和3年（2021年）度版中学校社会科
内容解説資料として扱われます。

中学校社会科 新 学習指導要領対応

中学社会とSDGs

SDGsを活かして授業はこう変わる

新学習指導要領に盛り込まれた「持続可能な開発目標（SDGs）」は，2030年までに持続可能でよりよい世界をめざすための国際目標です。

地球環境問題だけではなく，社会・経済全般にわたってSDGsの視点を活かした『中学社会』の学習とはどのようなものか，日文の新版教科書の紙面を紹介しながらわかりやすく解説します。

地理的分野
●東北福祉大学准教授
浅川　俊夫

歴史的分野
●宇都宮大学准教授
熊田　禎介

公民的分野
●岡山大学教授
桑原　敏典

本資料は，一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り，配布を許可されているものです。

日文の教科書情報
詳しくはWebへ！
日文　検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

SDGsを活かした授業づくり 地理

●東北福祉大学准教授 浅川 俊夫

▲ 教科書 P.92-93

12 つくる責任 つかう責任

持続可能な生産消費形態を確保する。

地球的課題とSDGsの必要性 ▶ Goalへの取り組み ▶ 達成のための課題や私たちに必要な行動 ▶ チャレンジ 地理 持続可能な社会をつくるために

▲ 教科書 P.94-95

1 SDGsの達成に果たす地理的分野の役割

新しい中学校学習指導要領は，社会科の教科目標の一つとして「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養う」ことを掲げています。この点からすれば，社会科は中学校教育の中でSDGsの達成を担う中核的な教科と言えるでしょう。その中でも，日本や世界の地域に関わる諸事象を扱う地理的分野は，私たちが生活する現在の日本・世界で，SDGsの達成がなぜ必要なのか，SDGsにどのように取り組まれているのか，達成のためには何が課題なのかを知り，それを踏まえて私たちはどう行動すればよいのかを考える役割を担っています。

こうした役割の視点から新学習指導要領に示された地理的分野の内容をみると，中項目「B(2)世界の諸地域」では，世界の諸地域の地域的特色や地球的課題を理解したり，地球的課題を地域的特色と関連付けて考えたりすることを通して，世界におけるSDGsの必要性やSDGsへの取り組み，達成のための課題，そして私たちに必要な行動を理解したり，考えたりする学習の展開が求められています。また，中項目「C(2)日本の地域的特色と地域区分」「C(3)日本の諸地域」では，日本全体と各地方の地域的特色や課題を理解したり，地域の特色を生み出す事象の成立条件をそれぞれの地域の課題と関連付けて考えたりすることを通して，日本におけるSDGsの必要性やSDGsへの取り組み，達成のための課題，そして私たちに必要な行動を理解したり，

考えたりする学習の展開が求められていると言えるでしょう。さらに，中項目「C (4) 地域の在り方」では，私たちの生活の場である地域で地理的な課題を見出し，その解決について SDGs の理念である持続可能性に着目して考えることを通して，地域のレベルで SDGs を達成するために私たちに必要な行動を考え，地域の一員としてそれを実行しようとする態度につなげる学習が求められていると考えられます。

2 新教科書にみる SDGs の学習と育まれる資質・能力

それでは，そのような SDGs に関わる学習は，新しい日文の地理教科書では，どう具体化されているでしょうか。

左にあげた紙面は，「B (2) 世界の諸地域」に位置付けられる北アメリカ州の単元の中から，その一例を示したものです。北アメリカ州では，「世界に影響をあたえる産業」をテーマに，主にアメリカ合衆国に焦点をあてて学習が進みます。教科書 P.92-93 では，単元の学習のまとめとして，「アメリカの大量生産・大量消費の社会は，どのような課題をかかえているのでしょうか」という【学習課題】を設定し，人々の生活スタイルをめぐる問題やその解決をめざす「持続可能な社会」をつくるための取り組みなどについて理解したり，考えたりする学習の展開が想定されています。こうした展開を SDGs の視点からみれば，Goal12「つくる責任 つかう責任」がなぜ必要なのか，どう取り組まれているのかを理解したり，考えたりすることに他なりません。紙面の都合で省略しましたが，続く教科書 P.94-95 では，【チャレンジ地理】として「アメリカでも持続可能な社会をつくる必要がある」とする立場から「大量生産・大量消費の社会を発展させていくべきだ」と考えているアメリカの人々との模擬討論が設定されていて，それを通して Goal12 を達成するための課題や私たちに必要な行動について理解したり，考えたりすることが出来るような学習の展開が想定されています。

新しい日文の地理教科書で，SDGs の視点から展開ができる学習は北アメリカ州だけではありません。「世界の諸地域」でみれば，アフリカ州のモノカルチャー経済の課題やその克服への取り組み（教科書 P.76-77）は Goal1「貧困をなくそう」とつながりますし，ヨーロッパ州での環境保全への取り組み，資源・エネルギー政策（教科書 P.66-67）は Goal7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」につながります。南アメリカ州における人と環境にやさしい都市の様子（教科書 P.101）は Goal11「住み続けられるまちづくりを」につながり，同じ南アメリカ州での熱帯雨林開発をめぐる環境問題や環境に配慮した取り組み（教科書 P.102-103）は，Goal15「陸の豊かさも守ろう」とつながります。

「C (2) 日本の地域的特色と地域区分」と「C (3) 日本の諸地域」でも，新しい教科書には SDGs の視点から展開できる学習が数多く取り上げられています。日本全体の地域的特色と結び付いた環境問題への取り組み（教科書 P.154-155）や防災・減災への取り組み（教科書 P.148-151）は，Goal7 や Goal13「気候変動に具体的な対策を」につながっていると言えるでしょう。自然環境を保全しながら観光業を発展させる取り組み（九州地方／教科書 P.173）や，農産物を活用した地域活性化の取り組み（中国・四国地方／教科書 P.186-187），世界をめざす企業と伝統産業の取り組み（近畿地方／教科書 P.200-201）などは，Goal12 につながっています。とくに東北地方（教科書 P.234-247）は，SDGs がめざす「持続可能な社会づくり」を，全体を貫くテーマとした学習の展開が想定されています。

さらに，新しい教科書の最後に位置付けられている，京都市を事例とした「C (4) 地域の在り方」（教科書 P.263-273）は，地域の状況に応じて工夫することで，SDGs の Goal すべてにつながる学習の展開が可能なのではないでしょうか。

最後に，地理的分野の学習が SDGs とつながることで，生徒はどんな資質・能力を身に付けることができるのかを考えてみたいと思います。地理的分野の目標として掲げられている知識や技能，思考力・判断力・表現力といった資質・能力を身に付けられることは言うまでもありません。それに加えて，SDGs で設定された 17 の Goal を達成するために，私たちの行動を見つめ直し，人々と協力しながら達成のために必要な行動につなげることが何よりも重要です。それはつまり，社会科の目標に示されている「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度」に他ならないのではないでしょうか。これはまさに今求められている資質・能力です。

●浅川 俊夫（あさかわ としお）
専門分野／中等地理教育
2016 年 3 月まで，埼玉県で公立高校教員として地理教育に携わるとともに，その間，国立教育政策研究所教育課程調査官などを経験。現在は，教育学部教員として中等教育教員養成にあたっている。
日本文教出版『中学社会』教科書著者

SDGsを活かした授業づくり 歴史

●宇都宮大学准教授 **熊田 禎介**

課題例 ① 災害の歴史に学ぶ

2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災の発生以降，過去の災害について学ぼうとする取り組みが，広く行われるようになりました。

文字による記録だけでなく，遺跡の発掘調査などの成果を組み合わせて，過去の災害の被害の実態や復興の過程を明らかにしようとする研究が進んでいます。今後のそなえを検討していく際の大切な情報の一つに位置づけているのです。

学習課題 災害に強い社会の実現をめざし，防災・減災に関するそなえを過去から学びましょう。

ステップ1 日本列島では，いつ，どのような災害が起こっていたのでしょうか。
資料1 から，どの時代にどのような災害が多かったのか読み取りましょう。

ステップ2 先人たちは災害にどのように向き合い，生きぬいてきたのでしょうか。
資料2〜7 のほか，テーマ別さくいん「ききん・災害・疫病」（► P.299）も活用して，どのような人々がどのように対処してきたのか，整理しましょう。また，身近な地域に似たような事例がないか，調べましょう。

ステップ3 先人の取り組みをふまえ，現代も継承・発展すべきことは何でしょうか。自分の考えをまとめましょう。
資料2〜7 にある先人たちの取り組みが現代に引きつがれていないか，考えてみましょう。

公民的分野の学習に向けて
政治単元 現在の国や地方公共団体の災害に対する取り組みを学びましょう。
国際単元 環境問題や自然災害に対する国際協力の重要性が高まるなか，日本の国際社会への貢献や果たしている役割を学びましょう。

資料1 日本列島で起きた災害
過去に日本列島で起きた災害を正確に把握することはたいへん困難なことですが，死者が1000人をこえる大規模災害の発生回数を読み取り，過去の災害のおおまかな傾向を見てみましょう。

死者1000人以上(推定)の大規模災害（河田惠昭作成資料，2018年現在）

資料2 ききん対策
青木昆陽『甘藷記』（国立国会図書館蔵）『蕃薯考』を庶民向けにわかりやすく書いたのが『甘藷記』です。
さつまいもの栽培 18世紀の享保のききんで，人々がうえに苦しむのを見た青木昆陽は，『蕃薯考』を書き，琉球から薩摩に伝わっていたさつまいもに着目して普及を訴えました。
江戸幕府の8代将軍徳川吉宗が，この本と種芋を諸国に配ると，やせた土地でも育つさつまいもの栽培が広がりました。

資料3 干害対策
かんがい設備 大阪狭山市の狭山池は，1400年前の飛鳥時代につくられました。以後，行基や朝廷が貯水量を増やす工事を重ね，周辺の農地の水不足を解消し農業を支えてきました。

資料4 被災民対策
（荒歳流民救恤図 東京都 国立国会図書館蔵）
天保のききんで蘭学者の渡辺崋山らが京都に設置した救小屋
救小屋 江戸時代，幕府をはじめ寺社や個人によって建てられ，被災民を収容して食料をあたえました。

資料5 洪水対策
信玄堤（山梨県甲斐市） 甲斐国（山梨県）を治めた戦国大名の武田信玄が，16世紀なかばに築いた堤防で，今に残されています。
治水事業 自分の力で領国を治めた戦国大名は，領民の生活を守るとともに，安定した年貢の確保をめざして，農業などを盛んにし，治水事業に力をそそぎました。

資料6 防火対策
町火消 江戸時代，江戸の大半を焼失させる大火が，10回以上も発生しました。木造家屋が密集して建ちならぶ都市では，火災は，最も身近でおそろしい災害でした。
1718年，それまで中心であった武士の消防組織に加え，町人の消防隊である町火消が設置されました。費用は町人が負担し，江戸全体で約1万人いたと伝えられています。
町火消（東京都江戸東京博物館蔵）

資料7 地震津波対策と災害の記憶の継承
岩手県姉吉の大津浪記念碑
地震津波碑 岩手県宮古市の姉吉に「高き住居は児孫の和楽 想へ惨禍の大津浪 此処より下に家を建てるな」と刻んだ石碑があります。この石碑は，1933（昭和8）年の昭和三陸地震津波の後，海抜50mのところに建てられました。姉吉地区は，このときの津波と，1896（明治29）年の二度にわたって地震と津波におそわれ，生存した住民がそれぞれ4人と2人という壊滅的な被害を受けていました。石碑を建てて以降，石碑より低い場所に住む人はなく，東日本大震災のときも海抜40.5mのところまで津波が押しよせましたが，民家はこの石碑より高いところにあり，住民は無事でした。
こうした石碑は，全国各地に建てられています。過去の災害の記録と記憶をとどめ，未来に向けた防災の糧とすべく，データベース化して広く公開する取り組みも進んでいます。
国立民族学博物館のウェブサイト「津波の記憶を刻む文化遺産－寺社・石碑データベース」

300 「歴史との対話」を未来に活かす　301

▲ 教科書 P.300-301

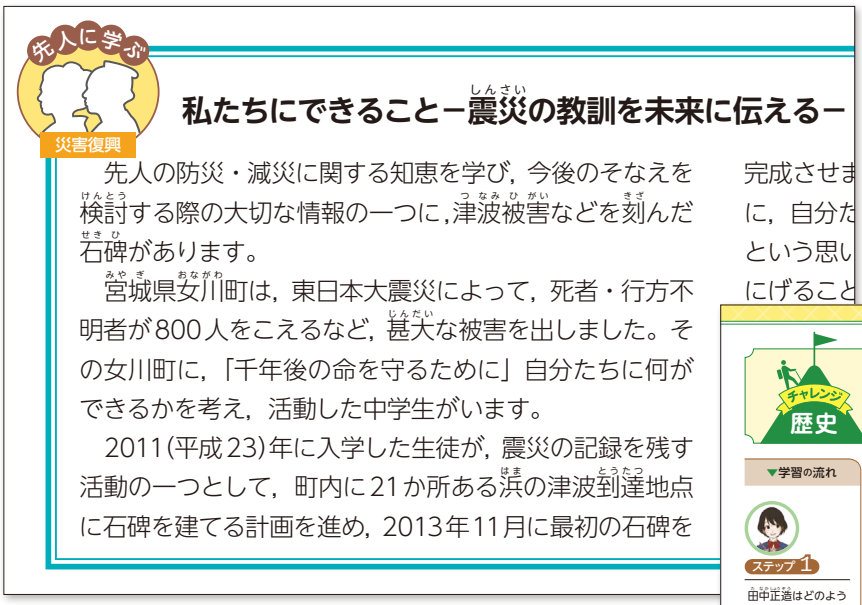
1 新学習指導要領で示された内容とSDGsのつながり

中学校歴史的分野の内容とSDGsとの接点を考えた時に，まず想起されるのはいわゆる「構想」の学習です。歴史的分野の最終項目に位置づけられた本学習では，「これまでの学習を踏まえ，歴史と私たちとのつながり，現在と未来の日本や世界の在り方について，課題意識をもって多面的・多角的に考察，構想し，表現すること」（中項目「C（2）現代の日本と世界」）が目指されています。一見すると，現在と未来の社会を対象とした学習と捉えられそうですが，このなかで歴史学習はどのような位置と役割を果たすのでしょうか。

2 教科書のどの教材が，SDGsとつながるか

SDGsは，2030年までに実現すべき世界を描いた17のゴールとその課題ごとに設定された169のターゲットから構成されていますが，そこには貧困や飢餓，教育，ジェンダー，経済成長，環境問題をはじめとした広範な現代的課題が網羅されています。

なかでも，近年，地震・津波や風水害をはじめとした多くの自然災害に見舞われている中，今後の復興や防災・減災の在り方を考えることは喫緊の課題の一つといえるでしょう（Goal11，Goal13 参照）。新しい日文の歴史教科書では，「構想」の学習の一例として，2011年3月11日の東日本大震災の発生以降，広く行われるようになった過去の災害に学ぼうとする取り組みが取り上げられています（教科書 P.300-301「課題例① 災害の歴史に学ぶ」）。たとえば，教科書 P.301の資料７には，1933年の昭和三陸地震津波の後に建てられた岩手県宮古市姉吉の地震津波碑の事例が紹介されていますが，「高き住居は児孫の和楽　想へ惨禍の大津浪　此処より下に家を建てるな」との碑文からは，２度にわたる津波被害とその記憶を未来の世代へと伝承しようとする当時の住民の切実な思いと取り組みの事実に触れる



▲ 教科書 P.291

▲ 教科書 P.299

▲ 教科書 P.216

ことができます。

このように，現代社会における諸課題を理解・解決していくために，過去の事例を題材として当時の人々が直面した課題とその解決のための取り組み（選択・判断）に向き合いながら，今後のよりよい社会の在り方を構想するような学習が，SDGs に向けた社会科歴史学習に求められる役割の一つであると考えます。

3 SDGsを扱う授業によって，生徒にどんなことが期待できるか

その際，本教科書に収載された「テーマ別さくいん」（教科書 P.298-299）を有効に活用していくことが，SDGs に向けた社会科歴史学習を深めていくことにもつながると思います。子どもたちは，それぞれの問題意識に基づいて歴史学習を進める中で，「テーマ別さくいん」によって，たとえば「ききん・災害・疫病」の項目を参照しながら，古代から現代における歴史を問題史的に学んでいくことが考えられます。また，その学びの中で，現在でも宮城県女川町において，「千年後の命を守るために」過去の災害に学ぶとともに自分たちの経験を教訓として未来の世代に積極的に伝承しようとする取り組みが存在すること，そして，その主体が同じ中学生であること（教科書 P.291「女川いのちの石碑」）に出会うでしょう。

SDGs に関わる歴史上の出来事を授業で扱うことは，歴史の大きな流れや各時代の特色をとらえる学習においても，適時，継続的に積み重ねていくことが大切になると思います。具体的な事例として，近世では浅間山の噴火の甚大な被害に際しての「天地返し」の取り組みを通して，当時の自然災害からの復興に向けた先人の工夫や努力に学ぶことができます（教科書 P.149「天明のききんと復興」）。また，近代では足尾鉱毒事件をめぐって国の経済発展と各地域の環境保全のどちらを優先すべきかを，当時の時代的・社会的状況において子どもたち自身が選択・判断するような学習が可能です（教科書 P.216-217「経済発展か，環境保全か，足尾鉱毒事件を通して考えよう」）。

このように，先人の知恵に学ぶことができるコラムとして「先人に学ぶ」が，また歴史を面白く，深く学ぶ特設ページとして「チャレンジ歴史」が各編に配置されており，SDGs を扱う上で参考になる教材となっています。学びの主体である現在の子どもたちの問題意識を丁寧に見取りながら，歴史学習を組織していくことがますます重要になっていると考えます。

●熊田 禎介（くまた ていすけ）
専門分野／社会科教育学・歴史教育
主要著書／
井田仁康編『教科教育におけるESDの実践と課題～地理・歴史・公民・社会科～』（分担執筆，古今書院，2017年）
江口勇治監修・編著，井田仁康・唐木清志・國分麻里・村井大介編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』（分担執筆，帝国書院，2018年）
日本文教出版『中学社会』教科書著者

SDGsを活かした授業づくり 公民

●岡山大学教授 桑原 敏典

1 学習指導要領との関係と教科書での取り扱い

SDGs達成のためには，国内外の課題の原因や影響について理解させるだけでは不十分であり，その解決に向けて，将来，実際に行動することができる市民を育成しなければならない。このように考えると，平成29年告示学習指導要領においてSDGs達成と最も深く関係する公民的分野の内容は，内容「D　私たちと国際社会の諸課題」となる。ここでは，まず，「(1) 世界平和と人類の福祉の増大」において，SDGsを採択した国際連合について，その働きなどを学んだうえで，課題解決のためには経済的，技術的な協力が大切であり，国際社会の動きをふまえて我が国の役割を考察，構想し，表現することが期待されている。そして，「(2) よりよい社会を目指して」では，よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を多面的・多角的に考察，構想し，自分の考えを説明，論述することが期待されている。

以上のような学習指導要領の内容をふまえて，日本文教出版の令和3年度版『中学社会』公民的分野教科書では，様々な観点からSDGs達成に向けた取り組みを紹介するとともに，生徒に持続可能な社会を目指して自分に何ができるかを考えさせようとしている。教科書P.206（図1）では，本文において，SDGsは，国際社会全体が目指すものであると同時に，先進国と発展途上国では状況が異なり，重点的に取り組む目標が違っていることや互いの協力や支援が必要であることが述べられている。そして，資料として示された「日本の達成度の低い目標」を見ると，先進国である日本にも，SDGs達成が決して容易ではないことが理解できるようになっている。SDGsが従来の国際社会の取り組みと異なっているのは，掲げられた17の目標が具体的で，2030年という達成期限が明確に定められているという点である。そこで，生徒には，日本の達成度が低い目標を確認したうえで，具体的にその数値がどれくらいで，2030年の目標達成に向けてどの程度の努力が必要であるかを調べさせたい。例えば，女性国会議員の比率は，2018年の時点で10%を少し上回る程度であり，世界の平均に比べると10ポイント近く低くなっている。この指標を見るだけでも，SDGs達成が，日本にとっていかに困難な課題であるかを実感することができよう。

▲図1　教科書P.206　持続可能な社会をめざして

▲図2　教科書P.207　プラスチックによる海洋汚染に立ち向かう

SDGs達成は，決して他人事ではない。国民の一人として，中学生でも関わることができる課題もある。教科書P.207（図2）のプラスチックによる海洋汚染の事例は，そのことを示してくれている。自分たちの日々の生活が海洋汚染の原因となっており，遠い海に生息するクジラにも大きな影響を与えていること，その問題の解決のために身近な海の清掃に取り組む人がいることを知った中学生が，自分にもできることがないかを考えるようになることが期待されている。

SDGsの目標は多様であり，数も多い。その解決のためには，時間も労力も資金も必要である。そこで，どの目標に

優先的に取り組むかを考えなければならない。そのことは，自分の理想とする社会がどのようなものであるかを反映している。したがって，社会に対する見方が異なれば，優先すべき目標や，解決のために選択する方法も異なってくる。そのことが対立を生むこともある。教科書 P.207 では，このことを実感的に捉えさせるためにダイヤモンドランキングを使ってどの目標を重視するかを考える活動が設けられている。自分のランキングを他者と比較し，その違いについて話し合うことで，国際社会においてSDGs達成に向けての足並みがなかなかそろわないことを理解できよう。

▲ 図3　教科書 P. 2 - 3　これからの社会をどんな社会にしたい？

2 教科書全体を通してSDGsについて考える

公民的分野では，内容のD以外の経済や政治の領域の内容も，そのほとんどはSDGs達成に関わるものである。日文『中学社会』公民的分野教科書では，教科書 P. 2 - 3 にて17の目標を示している（図3）ほか，第１編において現代社会の特色のひとつとして取り上げており，教科書全体を通してSDGsについて考えられるよう工夫している。「B私たちと経済」の内容においては，特に，社会保障，消費者教育，財政と租税の学習などは，持続可能な社会の形成について考えさせるうえで鍵となる内容であり，SDGs達成に向けて行動するための基盤となる認識を形成するうえでも重要である。社会保障については，これらかの福祉社会のあり方を考えたうえで，受益と負担の均衡のとれた持続可能な制度をいかに構築するかという点からの学習が求められる。また，消費者教育については，自らの消費生活とその中での行動が，現在及び将来の世代の生活環境を変え得る力を持っていることを自覚したうえで，公正かつ持続可能な社会の形成に参画するという点からの消費生活の見直しが期待されている。「C　私たちと政治」では，SDGs達成に向けた政治的意思決定の仕組みを理解することと，そこに自らが関わるための政治参画のあり方を学ぶことが重要である。例えば，政治参加の学習においては，政治においては国民の意思をそれに十分反映させることが必要であるが，その一方で国民の意思は，マスコミやSNSなどの影響を受け易く，それだけに国民一人一人の良識ある主体的な判断力の育成が，民主政治の鍵であることを，生徒自身が多面的・多角的に考察する活動を通して自覚し，そのための能力を身に付けることが必要とされるのである。

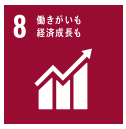
3 おわりに

SDGsの達成のために，今何をすべきかを学ぶことは，生徒に，自分たちの世代だけではなく将来の世代にとって何が必要かを，今後の社会の変化を予想しながら考察し，判断する力を身に付けることを期待している。今，どうなっているかを把握することでさえ難しいのに，さらに，予測困難な将来のことを見通しながら考えたり，決断したりしなければならないのである。しかし，冒頭で引用した内容D(2)の「多面的・多角的に考察，構想」の「構想」とは，まさにこのことを意味している。そのためにも，自分は将来どのような生き方をするのか，そのためにどのような社会を形成しなければならないのか，自分なりの考えを持つことができる生徒を育てたい。

●桑原 敏典（くわばら としのり）
専門分野／社会科教育，市民性教育
主要著書／（編著）『高校生のための主権者教育実践ハンドブック』明治図書，2017 年。（一部翻訳）アンドレアス・シュライヒャー著『教育のワールドクラス―21 世紀の学校システムをつくる』明石書店，2019 年。
日本文教出版『中学社会』教科書著者

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。		各国内及び各国間の不平等を是正する。
	飢餓を終わらせ，食料安全保障及び栄養改善を実現し，持続可能な農業を促進する。		包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。
	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し，福祉を促進する。		持続可能な生産消費形態を確保する。
	すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し，生涯学習の機会を促進する。		気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。
	ジェンダー平等を達成し，すべての女性及び女児の能力強化を行う。		持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し，持続可能な形で利用する。
	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。		陸域生態系の保護，回復，持続可能な利用の推進，持続可能な森林の経営，砂漠化への対処，ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。
	すべての人々の，安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する。		持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し，すべての人々に司法へのアクセスを提供し，あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。
	包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する。		持続可能な開発のための実施手段を強化し，グローバル・パートナーシップを活性化する。
	強靱（レジリエント）なインフラ構築，包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。		

「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」（外務省）（https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000270935.pdf）を加工して作成

中学社会と SDGs

日文　教授用資料

令和2年(2020年)5月29日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD22255

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大 阪 本 社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東 京 本 社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九 州 支 社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東 海 支 社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F•B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690